

十歳になった桜寺あかりの夏休みは、お父さんにつれられて外国で過ごすことになりました。昔から本を読むことが大好きで、活字のなかの外国の風景や街が憧れであるあかりにとって、このひと夏の旅行は大変楽しみなものでした。

飛行機をいくつか乗りかえて、ようやく辿り着いたアパートは、街から遠く離れた住宅地にありました。まさにあかりが思っていた外国の田舎の風景で、住みはじめてしばらくは飽きることなく、心地よい風がやってくる窓から外を眺めていました。

しかし一週間も経つと、窓から眺めるのはやめて、部屋のベッドに寝ころぶことが多くなくなってしまいました。お父さんは休日も仕事で忙しかったため、その間あかりはたった一人で留守番をしなければならなかったのです。

「街へ一人で行ってはだめ？」

「街に出るには、列車に乗って八つ先の駅まで行かなくちゃいけないんだ。気持ちにはわかるけど、僕はあかりだけで街へ行くのは心配で許可できないな。」

お父さんが帰ってくるのはいつも月が夜空を明るく照らしている頃で、一緒に出かけるには遅すぎる時間帯でした。

「お仕事が休日も忙しいって、お父さんここに来る前に言ってたじゃない。これくらい我慢できるから。」

謝ってばかりのお父さんに、あかりはいつも笑ってそう答えましたが、本当は寂しい気持ちと、残念な気持ちがかかるかと混ざっていました。

夏休みがちょうど半分終わった日の昼すぎ、あかりがリビングで宿題をしていると、いきなり玄関のドアがキィィと開く音がしました。鍵はきちんとかけたはずなのに……と、おそろおそろ玄関のほうへ忍びよっていくと、そこには座って汗を袖で拭うお父さんの姿がありました。あかりはびっくりして、

「お父さん！お仕事はどうしたの！？」

急いでお父さんのもとにかけました。

「最近休みが全然なかったから、今日は午前で帰ってもいいよと言われたんだ。だから、あかりが行きたがっていた街にも行けるぞ。さあ支度をしよう。」

やっと街に行けるの！あかりは大喜びで、鼻歌を歌いながら支度をしました。待ちに待った遠出です。一歩外に出ると、はたらきアリですら木陰で休んでいるのではないかと思うほどの熱風と日光が二人を待ちかまえていました。しかし、この日を楽しみにしていたあかりは暑いのおかまいなしに、お父さんを引っぱるように街へ向かいました。

気がつくと、太陽がほとんど隠れてしまい、空がオレンジ色と水色のあざやかなグラデーションに染まっていました。

「もう夕方になってしまったね。近くのレストランでおいしいご飯を食べて帰ろうか。」お父さんの方を振り返って返事をしようとしたとき、道路の向こう側に一軒の店が店じまいをしているのが目に入りました。外装が古く、オシャレな店が立ち並ぶ通りでは、その一軒だけが異なる雰囲気を漂わせているようにあかりには感じたのです。

「ねえ、あのお店は何の店？」

「んん？ああ、あれは古本屋だよ。さすが、本好きのあかりはするどいなあ。」

お父さんはそう言って、車が通らなくなった道路を渡って古本屋へ行き、シャツターを閉めかけていた店の主人と二言ほど会話を交わしてから、あかりに手招きをしました。

「もうすこしだけお店を開けてもらえるみたいだから、こっちへおいで。」

道路を渡り、お父さんのもとに走りました。店の主人は歯を見せながらにっこりと笑い、下ろしかけていたシャッターを開けて店のなかへ入っていったので、二人は主人に続いて入り、狭い店内を歩きました。

「並べてある本は違うけれど、雰囲気は日本の古本屋とあまり変わらないね。」

「おや、あかりは雰囲気まで味わうようになったんだね。」

お父さんは並べられている本をざっと見て、

「気に入った本があったら持ってきなさい。」

と言いつつ、レジで主人と会話をしはじめました。きつと私を話しているに違いな
いわ、とあかりは意識しつつ、ふと目についた赤ワイン色の背表紙の本を取りました。

「あら…この本は手書きなのかしら？」

外国の印刷方法は知らないあかりでも、にじんだインクを見てそう感じました。何枚かペー
ジをめくっていると、

「おや、その本にするかい？」

話を終えた二人が歩みよってきました。

「うん、これがいい。」

すると主人は、にこやかにお父さんに話しかけました。お父さんは主人に頭を下げ、あかり
に話の内容を伝えました。

「主人は、あかりさえよければ本を譲ってくださいさうだ。しかもお金はいらないとおっ
しゃっている。」

主人の気前の良さに、あかりは丁寧におじぎをして、本を受け取りました。

家に帰り、茶色の紙袋から本を取り出して、しばらく見つめていました。表紙は店で見た
時よりも明るい赤ワイン色をしていて、厚さはあかりの指ちようど二本分ほど。ところどころに擦った傷があり、角は丸みを帯びていて、紙の端は古さを感じさせる茶色が染みついて
いました。

「あかり、今日は疲れただろう。お風呂に入ったら、もう寝なさい。」

「うん。ねえ、この本いつか読んでくれる？」

日本語で書かれていたらすぐに読めたのに、と心のなかで思いながらあかりはお父さんに頼
みました。

「そうだなあ、僕も読んでみたいし、時間があるときに訳してあげよう。」

お父さんはパラパラと本に目を通して、あかりと約束しました。ようやく今日の疲れを感じ
たあかりは、急いでシャワーを浴びて、本を枕もとにそっと置いてベッドのなかにも潜りこ
みました。

はっと目を開けると、あかりは見知らぬ図書館に座りこんでいました。目の前には本。後
ろを振りかえっても本。見上げても本。あかりは、一体自分に何が起きたのか分かりませ
んでした。立ち上がり、自分より何倍も背の高い本棚の間を歩きまわって、誰かいないか探
しました。しかし、いくら進んでも本の壁しか出会うことができません。

「この図書館には誰もいないのかしら…。それにしても広い図書館ね。」

「そこに誰かいるのかい？」

あかりは突然の声に慌てて、声をした方へ近づこうかどこかに隠れようか迷っていると、一
人の青年があかりの目の前に姿を現しました。背はお父さんよりも高く、髪はすこし長めの
ブロンド。そして透きとおるような碧い目と白い肌の美青年に、あかりはおもわず顔を赤ら
めました。

「おや、可愛らしいお客さんだ。」

青年は驚きつつ、やさしくほほ笑んであかりに手を差し伸べました。

「久しぶりのお客さんだからびっくりしたよ。こっちに紅茶があるから、来るかい？」

「はい…」

見た目は外国人なのに日本語を話せる青年の細い指を見ながら、あかりは小さく答えて、差された手を握りました。夢のなかなら、どんなことが起きても不思議ではないことをあかりは知っていました。ついていった先には六人が座れるほどの大きな机がありました。椅子は二脚しかありません。

「そこに座ってて。」

指示されたとおりに椅子に腰かけ、青年が紅茶を淹れている間、図書館をゆっくり見まわしました。開かれた窓から涼しい風が入りこみ、白いレースカーテンをはたはたと舞いあがらせていました。二階の窓から降ってくる太陽の光は、高い天井に描かれた庭園の絵を浮かびあがらせ、まるでスポットライトの役割をしているかのようでした。

「まだ名前を聞いてないね。」

正面を向くと、青年が紅茶とスコーンをすすめてくれていました。

「私は桜寺あかり。あなたは？」

「僕の名前はマイオソティス。長いからミオって呼んで。この図書館の司書をしています。どうぞよろしく。」

「こんなに広い図書館をあなた一人で？」

「そう、僕一人で。」

よい香りの紅茶と美味しそうなスコーンを目の端で見ながら、あかりは疑問に思っていたことを尋ねました。

「あの、ここは夢なのですか？どうして私はここにいますか？」

「まあ、落ちついて。」

マイオソティスと名乗った青年は、窓際にもたれて、笑みをたやすことなく話を続けました。

「この世界は夢であっているよ。というよりも、夢のなかでしか存在できない世界なんだ。あかりはこの世界から現実には落ちてしまったものをそばに置いてるんじゃないかな。だから、ここに來れたんだよ。」

「あの本が…」

まさか、偶然古本屋で見つけた本がこの図書館の本だったなんて！あかりはミオに何か言おうとしましたが、視界がぼやけ、眠気が襲ってきたため、伝えることができなくなりました。

「そろそろ目覚める時間かな。またおいで。僕はいつでも歓迎するから。」
その言葉を聞いて、あかり意識を失いました。

小鳥の鳴き声で目覚めると、あかりはいつものベッドのなかにいました。枕もとに置いていた本のページをめくると、おどろくことに、中身がすべてアルファベットから日本語に変わっていました。本を開けたり閉じたりしましたが、何も変化は起きません。あかりの目は、未知のものに出会う科学者のように輝きました。

「この本と夢のことは、お父さんには内緒にしておこう。」

あかりは、自分が体験したことを不気味だとか、ただの夢などとは思いませんでした。自分が、どこかの国の物語に出てくる主人公になれた気がしたからです。この日からあかりは、夜はもちろん、昼間や夕刻のちよっとした時間にも図書館を訪れるようになりました。ミオは毎回歓迎してくれて、いつも紅茶とスコーンあるいはクッキーをあかりに用意してくれました。訪れる回数が増えていくにつれて、あかりとミオとの距離は近くなり、あかりは身のまわりのことを話すようにもなりました。いままで読んできた本のこと。外国に憧れていたこと。自分の趣味や日本での休日の過ごし方。そして、あまり好きではない学校のこと。お母さんを小さい頃に亡くしたこと。ミオは、あかりの楽しい話もつらい話も、すべて真剣に耳を傾け、あかりにやさしく言葉をかけたのです。

「あかりはお母さんがいないけど、僕は、あかりには強く生きてほしいな。いままで、あ

かりみたいに親を亡くした子どもに何人か会ってきたけど、みんな心に大きな穴が空いて、自分で自分の心を支えることができていなかった。でも、あかりはしっかりと前を見て歩んでいける力があると僕は思うんだ。」

ミオの言葉は、あかりの心をじんわりとあたためて、ほぐしてくれるのでした。

また、ミオの話はとても興味深いもので、あかりは何でも質問し、じっとミオの話に耳を澄ませて聞くのでした。

「どうしてこの図書館はいつも太陽が昇っているの？夜は来ないの？」

「現実では、時間をゆっくりにすることはできても、完全に止めることはできない。でも夢の世界は違う。夢は人の心で見えるもので、現実みたいに物質には依存しないんだ。だから、あらゆる物理法則を無視することもできる。空を散歩することだってできるし、時間だって、気分次第で自由に止められるんだよ。巻き戻したり、早めたりも可能だ。僕は太陽が好きだから、いつでも昼の状態にしているんだ。暗闇は好きじゃないから、夜はあまり来ないようにしているよ。」

「この世界じゃ、みんな魔法使いになれるのね。」

お父さんに似ているようで、でもどこか違うミオ。あかりは、そんなミオといつまでも一緒にいられたらなという思いを、ひっそりと心のなかに秘めるのでした。

ある日の昼下がり、あかりは図書館に置かれていた小説を読み終えてふとつぶやきました。「私も、こんな素敵な物語を書きたいな。」

「僕も、あかりが書いた物語をぜひ読んでみたいね。そうだ、作家のタマゴさんにあれを見せてあげよう。」

本棚の向こうに行ってしまったミオは、すぐに木の箱と黒い小さな壺と羊皮紙を持って帰ってきました。

「開けてごらん。」

言われたとおりに箱をゆっくりと開けると、そこにはミオの瞳と同じ色をした、ガラスのペンが仕舞われていました。

「わあ、とても綺麗！」

「何か書いてみるかい？」

きらめくガラスペンの重さに驚きながら、あかりはペン先を羊皮紙にそっとあてました。

「あら、おかしいわ。このペン、インクがでてこないの！」

「ふふ、驚いた？ガラスペンで書くには、インクを充填しなくちゃいけないんだよ。ペンを貸してみて。」

ミオは黒い壺にペン先を入れてから、羊皮紙にすらすらと文章を書きはじめました。

「何を書いているの？」

「ある小説の「節」をね。」

そこであかりはあることを思い出して、ミオに尋ねました。

「そういえばミオ、古本屋で見つけたあの本、アルファベットから日本語に変わっちゃったの。どうしてか知ってる？」

「ああ、あれはあかりが読みやすいように僕が書きかえたんだよ。もう全部読んだ？」

「もちろん！とても不思議な物語だったけど、最後まで胸がどきどきしたわ。」

「そう、それはよかった。」

どことなくうれしそうな顔のミオは、しばらく窓の外を眺めていました。

夏休みも終わりに近づき、図書館に通いつめているあかりも、日本へ帰る準備をしなくてはならなくなりました。

「ねえミオ、私そろそろ日本に戻らなくちゃいけないの。」

「夏ももうじき終わってしまうね。」

そしてすこし真剣な顔つきをして、あかりのそばに寄ってゆっくりと語りはじめました。

「実はね、今日であかりはここへ来れなくなってしまうんだ。」

「え、どうして！私が日本に帰るから！？」

突然のミオの別れの言葉に、あかりの頬に涙が静かに伝いました。

「違うよ。この世界にはね、あかり。自分のやりたいことが見つからない子だけしか来ることができないんだ。この前、あかりはやりたいことを見つけた。」

「物語を書くこと？」

流れる涙を拭いながら、あかりはじっとミオを見つめました。

「そう。僕は図書館の司書という仕事があるけど、もうひとつ、子どもたちの夢を一緒に探すという別の役目もあるんだ。」

「夢を探す…」

「作家になりたいという、その夢を大切にしてほしい。」

あかりは黙ってじっとうつぶさしました。

「ミオに会えなくなるなら、目覚めたくない。ずっとここにいる。」

「困った子だ。それじゃあ、あかりのお父さんが心配するじゃないか。」

ミオは立ちあがって、あかりを軽々と抱きあげました。はじめてのお姫さまだっことに、あかりは顔を真っ赤に染めました。

「図書館以外のところには行っていないから、外に出てみようか。目をつむっていい。」

まぶたの向こうに光を感じて目を開けると、二人は蝶が飛び交う、広く芳しき庭園の中心に立っていました。

「すごい…こんなところがあったなんて。」

「この庭園はいつでも、たくさんの花が咲いているよ。春には薔薇、夏には向日葵、秋は金木犀で、冬は水仙が綺麗だな。」

「お花は、昔お母さんも好きだったから、私も好きなの。」

センスよく植えられた花たちの影から、お母さんがこちらを見ているような気がして、あかりはミオの胸に顔をうずめました。

「私、ミオとお別れしたくない。」

また涙が溢れてきたあかりを、ミオは庭園のベンチに座って、生まれたての子猫を包みこむように、あかりを抱きました。

「じゃあ、ひとつ約束しよう。あかりが大きくなって、もっというんなことを知るようになって物語を書いたら、それを僕に見せに、またここにおいで。」

「うん。絶対に、また、来るから…」

すでにまぶたが重くなりはじめたあかりは、思うように動かない手でミオの頬をなで、そしてほほ笑みながら目を閉じました。

「ずっと、ここで待っているから。」

夢の世界から覚めると、お父さんが朝の食パンを焼いている最中でした。

「どうしたんだい、そんな顔をして。体調が悪いのかい？」

「ううん、大丈夫。」

無意識に枕もとに手を伸ばすと、なんと本の他に、図書館でミオが見せてくれたガラスペンとインク壺も共に置かれていました。驚いたあかりは、お父さんにばれないようにガラスペンと壺を布団に隠しつつ本を開くと、ミオとお別れをってしまったせいか、全てのページが真っ白になっていました。あかりは泣きそうになりましたが、ミオとの約束を思い出して、お父さんが用意してくれたテーブルに座りました。

「ねえ、私ね、作家になろうと思うの。」

「へえ、それはいい夢だね。あかりがその気なら、僕は応援するよ。」

「うん、ありがとう。」

あかりは、食パンに蓮華草から採れた蜂蜜を塗りながら、ふと心のなかでつぶやきました。そういえば、あの本は誰が書いたものだったのかな。私が感想を言くと、ミオはうれしそうだったけれど、もしかしてあの本を書いたのは……。そうだ、いつか書く物語は、真っ白になったしまったあの本に、ガラスペンで書こう。きっとミオだって、そう望んでいるに違いないわ。そして本を持って、また会いに行こう。私の、大好きな大好きな初恋の人に。